

Yǒu chǐ qiě gé  
有耻且格  
はしあ か たた  
恥有りて且つ格し

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄



「日本文化は恥の文化である」と評した人物がいます。その人の名はルース・ベネディクト。アメリカの文化人類学者です。その著書の名は『菊と刀』。第二次大戦後、これが日本で翻訳され、一大旋風を巻き起こしました。

彼女の言う「恥」の文化とは、世間体や人目を気にする文化のことで、今風に言えば空気を読む文化。裏を返せば「罪の意識を伴わない」薄っぺらな文化ということです。「身内の恥をさらすな」「旅の恥はかき捨て」などという言葉にそれは代表されます。バレさえしなければ何をやってもいいのか、そう言われてみると日本人として思い当たるふしが無くもありません。良い意味で、戦後の日本人が自分たちの文化を見直す契機となったのは事実です。しかし一方、日本人の持つ「恥」の意識は、必ずしも否定すべきものとは限りません。キリスト教やイスラム教のように強力な宗教基盤を持たない日本人社会では、お互いを戒め合い、労り合い、社会生活を円滑に行うための手段として必要不可欠の、しかも独自の優位性を持った道德規範であったとも言えます。

なお、この著作は対日軍事目的の研究をもとにまとめられたものなので、作者個人の真意がどこにあったかはよくわかりません。しかも彼女は戦後まもなく世を去っているのです、その後の研究の進展について想像することもできません。ただ一つ言えることは、「恥」の意識の根源には触れていないということです。

ではその根源はどこにあるのか。話は少し飛びますが『論語』に孔子の言葉として次のような一節が見えます。「道之以政，齊之以刑，民免而无耻(Dào zhī yǐ zhèng, qí zhī yǐ xíng, mǐn miǎn ér wú chǐ)」  
これ みちび まつりごと これ ととの けい  
(之を道くに 政 を以てし、之を齊うるに刑を以て

すれば、民免れて恥なし) (為政第二)。政治の力で人々を誘導し、刑罰によって社会の安定を維持しようとするれば結果はどうなるか。人々は刑罰から逃れさえすればそれでよしと考え、犯した罪を恥じることもないだろう。「道」とは誘導すること、「政」とは政治のこと、「齊」とは安定を維持すること、「刑」とは刑罰のことです。つまり「恥」の心は政治権力や刑罰などの強制によって作られるものではない、ということです。

孔子はさらに続けます。「道之以徳，齊之以礼，有耻且格(Dào zhī yǐ dé, qí zhī yǐ lǐ, yǒu chǐ qiě gé)」  
これ みちび とく これ ととの れい  
(之を道くに徳を以てし、之を齊うるに礼を以てすれば、恥有りて且つ格し)。道德心でもって人を導き、礼の規範でもって秩序を保つならば、人々は己の罪を恥じて正しい方向に進むだろう、と。ここでいう「徳」とは道德心、モラルのことです。「礼」とは道德心が形となって現れたもの、つまりマナーのことです。モラルとマナーは権力からの強制によって与えられるものではありません。長期にわたる教育と習慣によって徐々に培われていくものだと、孔子は常日頃から主張していました。それを可能にしてくれる本源が「恥」の心です。孔子のこの思いは、江戸時代『論語』の普及と共に、さまざまな曲折を経ながら武士道精神として徐々に日本人の心に定着していったのです。

しかし「恥」の心も武士道精神も、時が経てば錆びつくものです。宗教だって同じことが言えます。『論語』は「恥」の心を教えてくれると同時に、そこに錆があれば、それを削ぎ落す役目を果たしてくれる「砥石」のようなものではないでしょうか。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)